

「東洋」の一部としてのペルシア

——『文様集成』の編纂と伊東忠太¹

Persia as Part of the Orient: Ito Chuta's *Collection of Patterns and Designs*

モハッラミプール・ザヘラ
MOHARRAMIPOUR, Zahra

1. はじめに

正倉院や法隆寺の宝物の中にはペルシア由来のものがある。現代において疑う余地のないこの共通認識が芽生えたのは、明治期の古美術調査に遡る。1872年、明治政府によって実施された古社寺宝物調査と、その一環として行われた正倉院開封(1872年8月12日)を皮切りに、奈良の古美術の起源を西方に求める風潮が現れ、日本人がペルシアにも目を向けるようになる。とりわけ、1888年の古美術調査に参加したフェノロサ Ernest Francisco Fenollosa (1853-1908)の演説は、新聞でも報道され、正倉院宝物の西方伝来説を日本の知識人に広めた²。奈良宝物の西方伝来説が唱えられる中、歴史学者の三宅米吉(1860-1929)は法隆寺に残る四騎獅子狩文錦の起源がササン朝ペルシア(224-651)であると論じ、具体的な資料をもとにして日本とペルシアのつながりを指摘した。

このような見方に影響を受けた日本人の一人として建築家・建築史家の伊東忠太(1867-1954)の名が挙げられる。伊東は「法隆寺建築論」においてギリシャから奈良までの文化の伝播を論じたことで知られているが、彼がペルシアの芸術にも関心を抱いた人物であったということは、これまであまり注目されてこなかった。伊東が主体となって進めた大きなプロジェクトの一つに、建築学会³における『文様集成』の編纂刊行がある。全60輯からなる『文様集成』は、1911年7月から1916年6月まで毎月1輯ずつ出版された文様の集大成であり、そのうち第56輯が「波斯系文様」と銘打たれている⁴。ペルシア系統の文様のみを掲載したこの第56輯は、明治・大正期の日本におけるペルシア観を知るうえで重要な手がかりとなるが、この点はこれまで顧みられてこなかった。

本稿ではまず、『文様集成』を扱った先行研究で詳細に論じられることのなかったその編纂過程を整理し、出版の背景を探る⁵。さらに、第56輯の「波斯系文様」に焦点を当て、その実態をつまびらかにしたうえで、第56輯の編纂に伊東忠太が中心的な役割を果たしたことを示す。これらの考察を通して、当時の建築学会を中心とするネットワークの間でペルシアが注目された背景を浮き彫りにする。

1 『文様集成』の存在については、東京大学教授の今橋映子氏より示唆を受けた。本論は、筆者の専門であるペルシア美術との関連でこの集成を読み解こうとするものである。『文様集成』について、日本近代美術・工芸・建築界における意味をめぐると今橋映子氏の詳論は、今橋映子『近代日本の美術思想——美術批評家・岩村透とその時代』(白水社、2020年秋刊行予定)に収められる予定である。なお、日本建築学会図書館デジタルアーカイブスでは『文様集成』の英訳は、*Pattern Design Corpus*とされている。

2 井上章一「法隆寺への精神史」(弘文堂、1994年)、46-48頁。正倉院宝物の西方伝来説の起源に関しては、同書33-56頁を参照。

3 現在の日本建築学会の母胎となる組織。1886年に造家学会として設立され、1897年に建築学会と改称、1947年に日本建築学会となる。

4 『文様集成』は1923年1月から国際美術社によって再版された。

5 『文様集成』の出版を扱った先行研究としては、大西純子「関野貞と東京美術学校」、藤井恵介ほか編『関野貞アジア踏査』(東京大学総合研究博物館、2005年)、129-148頁および、角田真弓『明治期建築学史』(中央公論美術出版、2019年)、238-241頁がある。また、伊東の文様研究に関しては、山本謙治「装飾文様研究史(1) 明治期以来の文様

集成および伊東忠太の文様史研究』、『阪南論集人文・自然科学編』第40巻2号(2005年3月)、15-22頁がある。

6 『建築雑誌』第282号(1910年6月)、250頁。

7 1910年7月4日の役員会の決議には「『文様集成』ノ出版は定款改正の後最近総会の議に附し財政の許す範囲に於て之を執行する事」とある(『建築雑誌』第283号(1910年7月)、313頁)。本稿における引用文の漢字は、原則として常用字体に改めた。

8 『建築雑誌』第290号(1911年2月)、57頁。

9 『建築雑誌』第293号(1911年5月)、282頁。

10 角田真弓『明治期建築学史』、238頁には、5月に発表されたところだが、3月号および4月号にも同じものが掲載されている。

11 1911年5月8日の委員会(『建築雑誌』第293号(1911年5月)、282頁)には中條精一郎(1868-1936)が列席者主記として出席しているが、それ以降彼の名は見られない。

12 『建築雑誌』第293号(1911年5月)、282頁。

13 『文様集成』をめぐる建築学会と考古学会の交流を指摘した里見絢子の示唆的な論文「『縄紋』から『縄文』への転換の実相」、『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第39号(2015年3月)、220頁では、『考古学雑誌』において「竹葉子」の署名で掲載された紹介記事の筆者は、高橋健自であると推測されている。ただし、ここでは、『日本建築細部及文様図集』(木葉会、1911年)と『文様集成』が混同されているようである。

2. 『文様集成』発刊の経緯とその編集過程

『文様集成』の企画とその委員

まず、建築学会の機関誌である『建築雑誌』の記録をもとに、『文様集成』の出版の流れを観察しよう。『文様集成』の企画案を出したのは伊東忠太である。伊東は「日本装飾紋出版」の企画を1910年6月6日の役員会に提出する⁶が、建築学会はそれまで著作物を刊行したことがなく、出版や発売を可能にするためには定款を改訂する必要があった⁷。定款改訂が決議されたのは、1911年1月31日の総会においてであり、この総会では、伊東を含む9名の委員が会長指名により選定された⁸。このような過程を経て、建築学会は初めての出版物となる『文様集成』の編集に乗り出した。

この年の3月8日から文様集成出版委員会が纂修を開始し⁹、『建築雑誌』第291号(3月25日)には文様集成発刊趣意書が掲載される¹⁰。文様集成出版委員会は、建築学会の委員と名誉委員から構成されている(表1)。1911年1月に建築学会で選ばれた会員の9名は、塚本靖、伊東忠太、関野貞、大澤三之助、古宇田実、岡田信一郎、大江新太郎、天沼俊一、龜岡末吉である¹¹。3月の趣意書では古美術研究家で東京美術学校嘱託の白石村治が追加され10名となる。また、1911年7月(第295号)の趣意書には、名誉委員12名の名前が追加されるが、そのうち5人が4月22日から委員会に参加しているため¹²、4月の時点で名誉委員も決定していたことがわかる。名誉委員には、東京美術学校長の正木直彦、元京都美術工芸学校長で東京帝室博物館美術部長の今泉雄作、東京帝室博物館歴史部次長の高橋健自、歴史学者で東京帝国大学助教授の黒板勝美などが名を連ねている。最後に、1911年8月(第296号)の趣意書には名誉委員に美術史家の瀧精一が加わり、委員10名、名誉委員13名となる。こうして『文様集成』は、委員長である伊東忠太を中心とした建築家、美術家、考古学者、歴史学者の交流の結果として生み出されることになった。ちなみに、委員23名のうち、12名が考古学会の会員でもあり、建築学会と考古学会が密接に関わっていた様子が見受けられる¹³。『文様集成』の広告や紹介記事が考古学会の機関誌である『考古学雑誌』に随時掲載されているのもそのためである。

『建築雑誌』に見る『文様集成』の編集過程

『文様集成』は毎月1冊ずつ刊行され、7月から翌年6月で一つの期が構成されている。1911年7月から始まった刊行は、第5期が終わる1916年6月まで毎月絶え間なく続き、全60冊が世に出た。『文

様集成』の委員たちは、5年にも及ぶ出版過程において、どのように編集を進めたのだろうか。『文様集成』の画像をインターネット上で公開している日本建築学会図書館デジタルアーカイブスには、「その編集の方針は定かではない」と書かれているが¹⁴、『建築雑誌』に載せられた記録を丹念に追うことにより、編集過程を垣間見ることができる。1911年から1916年発行の『建築雑誌』には、「本会記事」という項目に、文様集成出版委員会に関する記事があり、出席者と決議が掲載されている¹⁵。この種の記事は、毎号必ず掲載されているわけではないが、委員会に関するこれらの記事と会告に記載された趣意書の内容を併せて整理すると編集の流れについて少なくとも以下の事実が浮かび上がってくる。

1) 各期の予定内容は、ほぼ毎月開かれる文様集成出版委員会で品目の案が出され、その中から1年間で毎月1輯を出版できるように、12品目を選抜し、それぞれの品目の主査委員が決定される。毎期の予定目次は、3月あるいは4月に決定し¹⁶、『建築雑誌』の4月あるいは5月の号に掲載されている¹⁷。この情報をもとに、出版予定であった目次と実際に出版された内容を比較してみると、順番や項目自体の変更があり、出版が必ずしも予定通りに進んでいないことがわかる(表2)。例を挙げるとすれば、第60輯にある「絵巻物文様」(1916年6月)は、1914年6月や、1915年6月にも予定されていたが、ようやく最後の第60輯として出版されている¹⁸。

2) 『文様集成』の各輯の登載図は基本的に出版予定の2-3か月前の文様集成出版委員会で決定され¹⁹、短い時間で出版に間に合わせた様子が見受けられる。

3) 第1期、第2期の内容は、日本の文様のみであるが、第3期からは、「朝鮮支那等の文様をも採用する事²⁰」に決まり、第4期から「東洋」各地の文様に拡大されている。

3. 『文様集成』発刊の目的とその背景

次にここで、文様集成発刊趣意書をもとに、その出版の目的を見ていこう。

文様は凡覆載間に於ける森羅万象を美化して、之を建築其他百般の工芸に応用し、此等をして善美の情趣を發揮せしむるの要素なり(中略)就中東洋文様は蔚然として一種独特の精華を現し、特に我国に於けるものは精の精、華の華なるものなり(中略)苟も身を建築界に投じ、指を美術工芸に染むる者は最深く此文様の研究に従ひ、古今に通じ東西に亘りて其精華を取り、悉く

14 <https://www.aij.or.jp/dal/zumenshasin/monyou.html> (2020年3月10日閲覧)

15 文様集成出版委員会に関する記事が掲載されている『建築雑誌』の号は以下の通りである。293号、305号、316号、317号、318号、319号、321号、322号、325号、326号、327号、329号、330号、333号、334号、335号、337号、340号、343号、345号、351号、352号。

16 ただし、第1期の目次は5月に決定している。

17 ただし、第2期の予定目次は1912年5月付であるものの、6月号(第306号)に掲載されている。

18 出版の変更に関しては、『建築雑誌』第293号(1911年5月)に掲載された「文様集成第一期出版予定品目」の備考に次のようにある。「一、此予定品目は実施の際多少変更することあるべし、二、此予定品目の模写撮影に就ては目下所有者の許諾を得んが為め少々依頼中なり」

19 登載図を決定する委員会において、その輯の主査委員が必ず出席することではない。なお、すべての委員会に出席しているのは委員長の伊東忠太のみである。

20 『建築雑誌』第316号(1913年4月)、201頁。

21 『建築雑誌』第291号(1911年3月)。

22 『美術新報』とその改革に関しては次の論文を参照。今橋映子「雑誌『美術新報』改革と岩村透・坂井犀水——大逆事件とポスト印象派の時代に」、『超域文化科学紀要』第19号(2014年)、176-137頁。今橋映子「大正改元期の〈美術問題〉——美術批評家・岩村透と輿論形成の戦略」、『比較文学研究』第100号(2015年6月)、81-111頁。

之を葉籠中のものとなし、之を咀嚼消化して更に清新卓抜の好意匠を案出し、各種の芸術をして遺憾なく其善美の情趣を發揮せしめざるべからず、然るに研究と適用とに資すべき文様は正確に之を蒐集大成せし者少く特に東洋に関するものに於て甚しとなす、偶之あるも選択当を得ず、模写杜撰印刷不備真を距ること遠く、却て後世を誤るの虞なしとせず、本学会は此に見る所あり、新に文様蒐集の事業を起し、建築的裝飾は勿論絵画彫刻陶瓦漆器銅器染織等百般工芸に応用せられたる文様を精選し、正確に之を模写印刷し斯道の研究に志ある諸君に頒ち、以て多年芸術界に於ける欠陥を補はんと欲す。²¹

ここではまず、「東洋文様」の独特の美しさが説かれ、中でも特に日本の文様が優れていると述べられている。それを踏まえて、建築家および美術工芸家は文様について知識を深め、古今東西の最も美しい文様を良く理解し、身につけたうえでさらに新しく美しい意匠を考案し、趣のある芸術作品を生み出すべきだという。つまり『文様集成』刊行の目的には過去の文様の研究と新しい建築や工芸への応用の二つの側面があった。そして、その対象は建築裝飾のみならず、絵画、彫刻、陶瓦、漆器、銅器、染織などに応用された文様を含み、幅広いジャンルの芸術に及んでいる。

この趣意書はさらに、日本において文様が正確に蒐集・出版されていない事実を訴え、『文様集成』はこの芸術界の空白を埋めるものであると主張している。こうした正確な文様集を作る意欲の背景には、日本の工芸品改良運動が考えられる。日本の伝統工芸品は1873年のウィーン万国博覧会以降、海外で好評を得ていたが、その後の工芸品の模様が模倣的なものばかりになったため、評価が下がってしまい、やがて明治末期には、意匠図案の改良が必要だとする声が高まる。このような背景のもと、日本工芸の将来が焦慮される中で、美術批評家の岩村透(1870-1917)と坂井犀水(1871-1940)が1909年10月に誌面改革を行った雑誌『美術新報』では、工芸品の改良問題が取り上げられるようになる²²。興味深いことに、この『美術新報』の第9巻3号(1910年1月)に掲載された「本誌賛助名家芳名」には、『文様集成』の編集委員でもある建築家の伊東、関野、塚本、美術学校長の正木、美術史家の今泉や瀧も名を連ねており、第10巻7号(1911年5月)には文様集成発刊趣意書も載せられているのである。工芸品改良問題が提起された一例として、坂井の筆による1911年12月号の「時言」を見てみよう。この「我美術工芸界は新頭脳を要求す」と題する文章によれば、工芸品展覧会に出品される作品の模倣は、固定的で器械的なものの繰り返しになっており、趣味が枯渇している。しかし、古代の名品の模倣はそれ自体悪いのでは

ない。むしろ、それらを深く研究したうえでその趣味を会得し、適切に活用すべきだという²³。この提言は、文様の研究と応用を重要視し、「善美の情趣を発揮」する作品の創作を目指す『文様集成』の理念と共鳴する。

明治末期は、建築界でも同時に、それまで日本で進められてきた建築をいかに新しく発展させるかという問題に直面した時期であった。1910年には、建築学会で「我国将来の建築様式を如何にすべきや」をテーマとした討論会が繰り広げられ、中でも伊東や関野は、日本独自の新しい建築の創造は、日本の趣味を土台にしたうえで、古今東西の建築を研究してこそ可能になるという見解を示した²⁴。

こうした時期において、創作の参考になる文様を正確に蒐集し刊行することは、芸術家たちの当然の願いでもあった。実際、文様集出版の構想は、過去に一度関野と正木の間で浮上しており、それが『文様集成』刊行の発端となったともいわれている²⁵。正木の日記²⁶によれば、1908年2月10日、イギリスの建築家・デザイナーであるオーウェン・ジョーンズの『グラマー・オブ・オーナメント²⁷』に触発された関野が正木に、美術学校の事業としてその日本版の編纂を提案した。それからわずか3日後、出版社の審美書院で毎月1冊ずつ発行することが決まっているが、その顛末は明らかではない。この企画の詳細はこれまで明らかにされてこなかったが、考古学会の機関誌には、この企画と建築学会の『文様集成』を比較するうえで糸口となる記事が存在する。

『日本模様彙纂』 歴代模様の変遷は芸術史上大に研究を値するのみならず、工芸家の各方面に於ける応用上にも欠くべからざる一要件にして、考古学上の見地よりするもまた頗る趣味多き好問題なりとす。現時国運の発展は益この研究を感じつゝあり。従来既に刊行せられたる図譜の類固より之れが要求を満すに足らず。本会評議員なる東京美術学校長正木直彦氏深く之を遺憾とし、工学博士関野貞、今泉雄作、関保之助、平子尚、高橋健自(以上本会評議員)溝口禎二郎、大村西崖、岸光景の諸氏を委員に依嘱し、協議の上系統ある模様譜を集成し、『日本模様彙纂』の名を以て真美書院^{ママ}をして出版せしむることゝなれりとていふその出版方法等に至りては他日之を紹介せむ。²⁸

この記事によれば、文様の変遷は、芸術史や考古学の分野において重要な研究テーマであるのみならず、工芸への応用にも不可欠であり、さらに国運の発展にまでつながる問題として意識されていた。企画のタイトルは『日本模様彙纂』となっており、委員としては正木と関野の他、今泉雄作、関保之助(1868-1945)、平子尚(鐸嶺)

23 『美術新報』第11巻2号(1911年12月)、45頁。

24 この討論会は1910年5月30日と7月8日に開催され、その内容が『建築雑誌』第282号(1910年6月)および第284号(1910年8月)に掲載されている。

25 この議論に関しては、大西純子「関野貞と東京美術学校」、143-147頁、および角田真弓『明治期建築学史』、238-240頁を参照。

26 正木直彦『十三松堂日記』、第1巻(中央公論美術出版、1965年)、20-22頁。

27 Owen Jones (1809-1874) の *The Grammar of Ornament* (London: Day and Son, 1856)。この書籍の中には、日本の装飾に関するものは含まれていない。

28 『考古界』第7篇2号(1908年5月)、86頁。1895年に設立された考古学会(1941年1月に日本考古学会と改称)の機関誌は、1896年12月に『考古学会雑誌』として創刊、1900年4月に『考古』と改題、1901年6月に『考古界』と改題、1910年9月に『考古学雑誌』と改題し現在に至る。

29 考古学会の会員に関しては、『考古界』第6篇3号(1906年12月)の名簿(明治39年12月20日現在)を参照。溝口の名は、この名簿にはないが、1908年3月に入会したことが、『考古界』第6篇12号、670頁から確認できる。なお、引用文にもあるように、正木、関野、今泉、関、平子、高橋は考古学会の評議員である。

30 藤原貞朗「日本の東洋美術史と瀧精一——中国美術史編纂をめぐる国際的・学術的競合」、稲賀繁美編著『東洋意識——夢想と現実のあいだ1887-1953』(ミネルヴァ書房、2012年)、301-303頁。

(1877-1911)、高橋健自、溝口禎二郎、大村西崖(1868-1927)、岸光景(1839-1922)の名が挙げられている。そのうち正木、関野、今泉、高橋、溝口の5名は建築学会文様集成出版委員会のメンバーでもあり、図案家の岸光景以外は考古学会の会員でもある²⁹。しかし、建築学会が中心的な役割を果たした『文様集成』とは異なり、この美術学校の企画に関わった建築家は関野のみで、伊東忠太の名は見られない。

この記事からは、『グラマー・オブ・オーナメント』の日本版を目指したといえる美術学校の『日本模様彙纂』が、日本以外の国の模様を扱う予定であったかどうかを窺い知ることはできない。しかし、芸術界の切望する模様集の出版を実現した『文様集成』は、伊東忠太が建築学会に提出した「日本装飾紋出版」の企画から、日本を中心とした「東洋」の文様を扱う意欲的な企画へと発展したわけである。

4. 『文様集成』における「東洋」の射程

建築学会が刊行を担った『文様集成』は、当時の建築界、とりわけ主導的立場にあった伊東忠太の「東洋」観を物語っている。『文様集成』における「東洋」を検討するために、まずはその地理的範囲を確認しよう。表2の対象地域を眺めると、日本、中国、朝鮮半島など、東アジアだけではなく、インド、トルコ、ペルシア、エジプト、さらにはビザンティン式の文様まで含むことがわかる。ところが、「東洋」の地理的範囲をこれほど広くとらえる姿勢は、当時の日本の「東洋美術史」ではけっして一般的ではなかった。20世紀前半の日本で、「東洋美術史」の題名が用いられたのは、日中の書画と彫刻を扱った書籍に限られていた³⁰。しかし、建築界には「東洋」の美術工芸をより包括的にとらえ、「東洋芸術」という表現を用いて語る傾向が見られる。その一例として伊東、関野、塚本が『文様集成』出版の直前に取りかかっていた『東洋芸術資料』の出版が挙げられる。1909年9月から1911年10月まで日本美術社によって出版された『東洋芸術資料』は全10集からなり、そのうち1、2、3、6、9、10集は「支那」の部、4、5、8集は「印度」の部、7集は「朝鮮」の部に当てられている。第1集の序文は「均しく東洋と称するも其の包括する畛域は、東経廿六度より西経百七十一度に跨り、北は寒帯より南は熱帯に及ぶ」の一文で始まり、ペルシア、トルコ、エジプトをも「東洋」の地理的範囲内に位置づけている。さらに、この資料集は「本邦、支那、朝鮮、印度を始め其他一般東洋芸術に関する最も正確なる資料の撰集」であるという。実際に出版されたものの範囲は、「支那」、「印度」、「朝鮮」に限られたが、より多くの地域を対象とする大きな企画が念頭に置かれていたことが見て取れる。

建築家の中でも、「東洋建築」あるいは「東洋芸術」を体系的に論じているのは、伊東忠太である。1892年に帝国大学工科大学造家学科を卒業し、大学院で日本建築史の研究を志した伊東は1893年に「法隆寺建築論³¹」を発表する。この論文において伊東は、法隆寺中門の柱にギリシャ建築にあるエンタシスの影響が認められると述べることで、ギリシャから奈良への文化の伝播を論じ、法隆寺を世界建築史の中に位置づけようと試みた。やがて伊東は、帝国大学工科大学助教授を務めていた頃、法隆寺の起源が古代ギリシャにあるという持論の裏づけを得るために、「支那・印度・土耳古」への留学を決める。

伊東は、1902年3月に東京を出発し、まず中国を周遊した後、インドを巡り、ペルシアにも足を運んでから、オスマン帝国へ渡る予定であった。伊東が旅行記で記述しているインドからの旅程³²を当時の旅行ルートと照らし合わせてみると、彼はインドから、アフガニスタンを経て、ロシア領土のトルキスタンからカスピ海横断鉄道でクラスノボツク（現在のトルクメンバシ）まで行き、船でバクーに向かい、そこから鉄道でバトゥミに渡り、さらに黒海汽船でイスタンブールへ行く予定であったことがわかる。そうすれば、地理的な観点からペルシアやトルキスタンに行くにも都合が良いと述べている。当時ペルシアに行くルートとしては、バクーから船でカスピ海沿岸の港であるアンザリーに渡る方法が一般的であり、伊東もそこからペルシアに入る計画であっただろうと推測できる³³。しかし、当時のアフガニスタンは、南下政策を図るロシアとインドの権益を守ろうとするイギリスの政治的抗争の舞台となっており、外国人の旅行が許される状況ではなかった。伊東は、インド政府からアフガニスタン旅行の許可を得ることができず、敢行すれば身の安全を保障できないと告げられた。さらに、ペルシア湾からイラクのメソポタミア地方に入ろうと企てるも、オスマン帝国の一部であるこの地域に入るには、先にイスタンブールで旅行の許可を得る必要があったため挫折する。やむを得ず伊東は、ムンバイから汽船でオーストリア＝ハンガリー帝国の統治下にあったトリエステに行き、ヨーロッパ経由でイスタンブールに行くこととなった。その後は、オスマン帝国内を旅行し、エジプト、パレスチナ、レバノン、シリアを訪れる。シリアのダマスカスからは、バグダードへ行き、バビロンやアッシリア、ササン朝ペルシアの遺跡を見る準備をしていたが、それも膨大な旅費と時間を必要としたため、断念せざるを得なかった³⁴。ペルシア・メソポタミア旅行の望みがかなわなかった伊東は、イスタンブールへ戻り、ヨーロッパ、アメリカを経由して1905年6月に帰国する。

この旅行中に東洋建築を考察した伊東は、帰国後に自らの東洋建

31 『建築雑誌』第83号（1893年11月）、317-350頁。

32 伊東忠太「支那旅行談 其の一」、『伊東忠太著作集 第5巻 見学・紀行』（原書房、1982年）、91頁。

33 イギリスの政治家・旅行家であるG・N・カーゾンGeorge Nathaniel Curzon（1859-1925）は、*Persia and the Persian Question*, (London: Longmans Green and co., 1892), vol.1, pp. 27-28でこのルートについて詳しく紹介している。同時期の日本人旅行者としては、例えば、新聞記者・ロシア研究者の大庭柯公（1872-1922頃）がバクーからアンザリーへの道をたどっている（大庭柯公「波斯遊記」、『南北四万哩』（政教社、1911年）、193-202頁）。

34 伊東忠太「支那旅行談 其の一」、92頁。

35 伊東忠太の旅行の意義に関しては、ジラルデッリ青木美由紀『明治の建築家伊東忠太——オスマン帝国をゆく』（ウェッジ、2015年）を参照。

36 『美術新報』第4巻22号（1906年2月）、176頁の「時報」に講演の記録がある。その内容は、伊東忠太「東洋建築ノ系統及其美的価値」、『日本美術協会報告』第1次185号（1906年4月）、23-41頁に掲載されている。ほぼ同じ内容のより短いバージョンは、「東洋建築の系統及其美的価値」、『早稲田文学』第2次3号（1906年3月）、70-80頁、あるいは「東洋建築雑話」、『日本美術』第92号（1906年10月）、1-4頁および「東洋建築雑話」、『日本美術』第93号（1906年11月）、1-4頁にある。

37 伊東忠太「東洋建築の系統及其美的価値」、『早稲田文学』第2次第3号（1906年3月）、70頁。

38 伊東忠太「東洋建築の系統及其美的価値」、『早稲田文学』第2次第3号、71頁。

39 伊東忠太「東洋建築雑話」、『日本美術』第93号、2頁。

40 伊東忠太「東洋建築の系統及其美的価値」、『早稲田文学』第2次第3号、77頁。

41 第1回は1905年4月5日-7日、第2回は1907年4月5日-7日、第3回は1909年4月12日-14日、第4回は1912年4月10日-12日、第5回は1914年4月8日-10日に開催された。

42 東洋生「工科大学建築科第二回展覧会（東洋芸術の部）」、『建築雑誌』第245号（1907年5月）、278頁。

43 「朝鮮」に関するものは関野、満州は伊東、佐野利器（1880-1956）、大江新太郎、大

築論を発表する³⁵。帰国の翌年、1906年1月27日には、美術協会常会で「東洋建築の系統及び其美術的価値」と題する講演を行い、自らが作成した東洋建築系統図を発表している³⁶。彼の「東洋」観を知るために、一例として『早稲田文学』に掲載された「東洋建築の系統及其美的価値」の冒頭を見てみよう。

此の問題を論ずる前に、先づ東洋といふこと、及び建築といふことの定義を下して置くのが至当の順序ですが、由来東洋といふことは頗る漠然たる意味に解せられて居るが、私は今亜細亜と埃及とを含ませるつもりです。それから建築とは単に家屋、殿堂のみならず、之れに附随せる彫刻絵画の類をも一切包括して居るものと見る。元来東洋建築、大きくいへば東洋芸術の問題は頗る広大なるもので、決して一朝一夕に解釈せらるゝものではない³⁷

伊東は東洋建築を論じる前に「建築」と「東洋」の定義をする必要があると述べる。伊東によれば、「東洋」の地理的範囲は以前から曖昧であるが、彼はその中にアジアとエジプトを含める。また、彼のいう建築は、家屋や殿堂といった建築物のみならず、それに付随する彫刻や絵画などの芸術も包含している。伊東は、東洋建築の系統を大きく東洋芸術の問題としてとらえているのである。彼は続けて、東洋人と趣味や文字を異にする西洋人にとって東洋芸術の研究は困難であるという。とりわけ中国と関係の深い日本人が「支那系統」の芸術を探求し、さらにその淵源に遡るという形で東洋全体を研究すべきだと述べる³⁸。西欧人の研究は「欧州を根拠として東方諸国に及ぶ」のに対して、伊東の研究は「大日本帝国を根拠として、漸次西方に及ばんとする」ものである³⁹。伊東のいう東洋芸術の研究は「世界的眼を以つて」なされるべきであり、その先に目指すのは「東西の関係を明かにする」ことである⁴⁰。伊東は、西洋的な知の体系を受け入れ、そのうえで日本を中心に据えた東洋研究および東西交流の研究を目指していた。日本を拠点とし、その淵源へと向かうという意味においては、まさに『文様集成』の編纂もこの理念の中に位置付けられるだろう。

ところで、帝国大学工科大学建築学科では、1905年から2年に一度「工科大学建築学科展覧会」が開催されていたが、伊東が帰国した翌年の1907年4月に開かれた第2回展では、東洋芸術の展覧会が企画された⁴¹。『建築雑誌』の報告によれば、「この展覧会は広い意味の東洋芸術全体を網羅したもので実に大規模⁴²」であった。会場には建築家たちが蒐集した建築やその他の芸術品の掲本、写真、標品などが数千点並べられた⁴³。ここでの「東洋」も朝鮮から西アジ

ア、ビザンティンまでを含む広義の「東洋」である。しかし、ビルマ、チベット、インド、西アジア、エジプト、トルコなどのものはすべて伊東が蒐集したものであり、伊東の旅行がなければ、この展覧会でもこれほど多くの地域の芸術品が展示されることはなかった。陳列の対象範囲も建築や彫刻に限られることなく、ビザンティン時代の金工品、レバノンのパールベックで採集した陶器の破片、トルコやエジプトの通貨までも含む。ササン朝ペルシアの部では、現在のヨルダンの首都アンマンの遺跡の写真があり、エジプト・西アジア・トルコの標品室には、ペルシアの筆箱と12-13世紀頃のペルシアの釉瓦の写真が展示されていた。この筆箱は、日本で展示されたペルシアの工芸品としては最も早いものの一つであろう。この展覧会の展示物は、伊東が世界旅行を経たうえでとらえた「東洋」の地理的範囲や、その芸術のジャンルの広さを窺わせるものである。

5. 『文様集成』におけるペルシア

「波斯系文様」とは何か

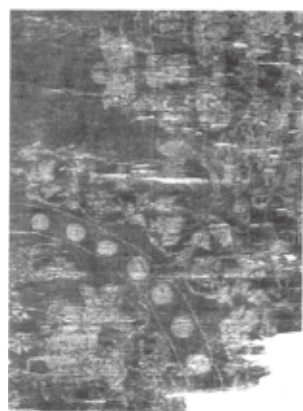


図1 『文様集成』第56輯、1頁「法隆寺献納御物 騎士狩獵紋(奈良時代)」

『文様集成』全体の文様の中で「波斯」と記載がある図版は、第43輯の「陶磁器」、第47輯の「霊獣霊鳥」、および第56輯の「波斯系文様」において確認できるが、ここでは、世界各地に散在するペルシア系文様を蒐集した第56輯を中心に考察を進める。

第56輯の「波斯系文様」は91図を含んだ18頁からなり、予定された目次では「薩珊系文様」となっている。つまり、この輯はもともとササン朝ペルシア系統の文様を集めるものとして企画されていた。文様を順番に見ていくと、まず1頁には、「法隆寺献納御物 騎士狩獵紋」が掲載されている(図1)⁴⁴。2頁に

は、東大寺や法隆寺のテキスタイルと敦煌で発見されたテキスタイル(図2)⁴⁵、3頁には1頁と異なる法隆寺の「騎士狩獵紋」が載せられている(図3)⁴⁶。4頁には法隆寺の水瓶と、ササン朝の水差しが配置されている(図4)⁴⁷。5頁以降は、主にヨーロッパ各地に所蔵されているテキスタイルや銀器などが18頁まで続いている。つまり、

熊喜邦(1877-1952)、「支那」は伊東、塚本、関野、平子が蒐集したものであった。

44 東京国立博物館所蔵「緑地狩獵連珠唐草円文錦」[I-337_177]。

45 右下の「奈良 東大寺蔵古裂」は、東京国立博物館所蔵「幡残欠(綾幡足・深緑地唐草文綾裂)」[N-309]。左の「大和 法隆寺献納御物錦裂」は、東京国立博物館所蔵「赤地獅子鳳文蜀江錦」[N-56]。

46 法隆寺所蔵「四騎獅子狩文錦」(国宝・重要文化財) <https://bunka.nii.ac.jp/db/heritages/detail/188856> (2020年1月28日閲覧)

47 右の「法隆寺献納御物水瓶」は、東京国立博物館所蔵「竜首水瓶」(国宝指定名称「金銀鍍龍首水瓶」) [N-243]。中央の「ペトログラード・ボプリンスコイ伯蒐集品」は、エルミタージュ美術館所蔵[K3-5753]、エルミタージュ美術館のデジタルアーカイブに画像が掲載されている。左の「ペトログラード・ポロフツォフ蒐集品」は、エルミタージュ美術館所蔵[Ks-5725]、ワシントン大学のWalter Chapin Simpson Center for Humanitiesの教育プロジェクトSilk Road Seattleのウェブサイトに画像が掲載されている。 <https://depts.washington.edu/silkroad/museums/shm/shmsasanian.html> (2020年5月16日閲覧)

基本的には日本から中国、そしてさらに西へという順番で同系統の文様を並べているのである。

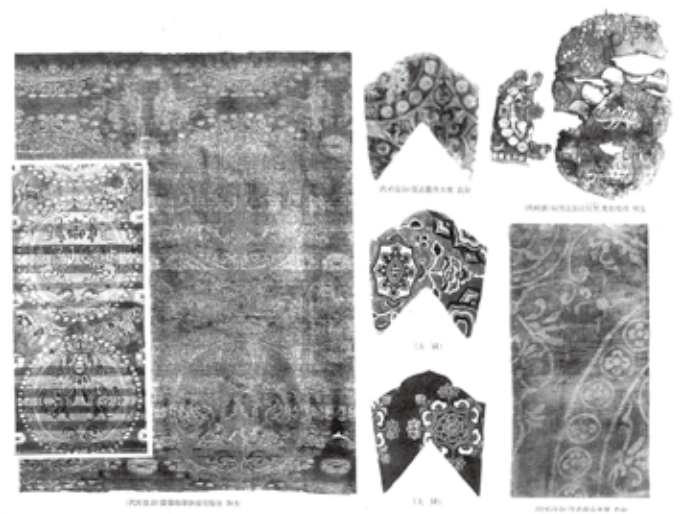


図2『文様集成』第56輯、2頁
右上「支那 敦煌発見 天馬紋及靈獸紋 (唐時代)」
右下「奈良 東大寺蔵古裂 (奈良時代)」
中上「奈良 東大寺蔵古裂 (奈良時代)」
中央「同上」
中下「同上」
左 「大和 法隆寺蔵納御物錦裂 (奈良時代)」



図3『文様集成』第56輯、3頁「大和 法隆寺蔵騎士狩獵紋 (奈良時代)」



図4『文様集成』第56輯、4頁
右 「法隆寺蔵納御物水瓶 (奈良時代)」
中央「露国 ペトログラード・ボプリンスコイ伯蒐集品 (薩珊時代銅壺 第六-第七世紀)」
左 「露国 ペトログラード・ボロフツォフ蒐集品 (薩珊時代銅壺 第六-第七世紀)」



図5 四騎獅子狩文錦の模様（『文』第1巻1号、7頁）

木を中心として左右対称に描かれている（図5）。このテキスタイルの模様の起源について日本で初めて研究を発表したのは三宅米吉である。ロンドンの大英博物館でエジプト、アッシリア、ギリシャなどの古代文明を研究した経験のある三宅は、1888年にこの模様に関する初めての論文を発表し、そこにはアッシリアの影響が見られると指摘した⁴⁹。しかしながら、1892年の論文ではアッシリアをペルシアに訂正し⁵⁰、それ以降この模様のペルシア起源説が定着することになる。このような連珠円の内側に花樹や動物を描いた模様が6世紀頃ササン朝ペルシアで流行し、東西に伝播したことは、現代においても通説とされている⁵¹。

『文様集成』第56輯の図版選定と伊東忠太



図6 『学鑑』（1915年5月20日）表紙

この中でも明治期の日本で特に話題をさらったのは3頁の「法隆寺蔵騎士狩獵紋」で、現代においては「四騎獅子狩文錦」と呼ばれる国宝・重要文化財である。このテキスタイルは、1884年にフェノロサと岡倉天心が法隆寺夢殿の調査で発見したものだといわれている⁴⁸。その模様には、数珠のように連なった珠の円の中に、獅子に向かって後ろ向きに弓矢を放つ4人の騎士の姿が真中の樹

48 龍村謙「大谷探検隊将来の古代錦綾類」、西域文化研究会編『西域文化研究 第6 歴史と美術の諸問題』（法蔵館、1963年）、42頁。道明三保子「法隆寺蔵四騎獅子狩文錦に関する一考察」、『古代オリエント博物館紀要』第3巻（1981年）、116頁など。

49 三宅米吉「法隆寺所蔵四天王紋錦旗」、『文』第1巻1号（1888年7月）、6-10頁。

50 三宅米吉「四天王紋錦旗」、『東洋学芸雑誌』第133号（1892年10月）、541-543頁。

51 前田たつひこ「連珠円文を求めて（研究プロジェクト 中央アジア諸民族の文化諸相に関する動態的研究）」、『東西南北』（2007年）、186頁。尾形充彦「犀円文錦の研究」、『正倉院紀要』第34号（2012年3月）、42頁など。ただし、連珠円文の起源や成立の時期に関する再検討の必要性も指摘されている（道明三保子「ササンの連珠円文錦の成立と意味」、田辺勝美・堀眺編『深井晋司博士追悼 シルクロード美術論集』（吉川弘文館、1987年）、153-176頁）。

第56輯の目次には図版の出典について「本輯所載の文様の大部分はオットー・ファルケ氏著クンストゲシヒテ・デル・ザイデシウエーベライより転載せるものなり」と書かれている。これは、ドイツの美術史家オットー・フォン・ファルケ Otto von Falke（1862-1942）が1913年にベルリンで出版した *Kunstgeschichte der Seidenweberei*『絹織物の美術史』（全2巻）である。この書籍は、丸善のPR誌『学鑑』1913年10月号において「11月及12月に着すべき新著」として掲載されている。ま

52 『文様集成』56輯にある日本のテキスタイルのうち、5頁の「日本 大和 東大寺正倉院蔵鳳紋」は『絹織物の美術史』119番、18頁の「日本絹織物」は『絹織物の美術史』124番とまったく同じ図版である。一方、3頁の「大和 法隆寺蔵騎士狩猟紋」は、『絹織物の美術史』110番にもあるが、『文様集成』では別の図版が使用されている。

53 伊東忠太「奈良模様の起源に就て(上)」、『考古学雑誌』第3巻3号(1912年11月)、123-127頁。「奈良模様の起源に就て(中)」、『考古学雑誌』第3巻5号(1913年1月)、241-249頁。「奈良模様の起源に就て(下)」、『考古学雑誌』第3巻6号(1913年2月)、305-311頁。

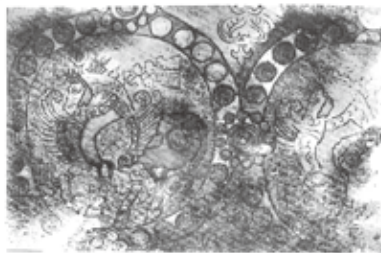


図7『文様集成』第56輯、13頁「仏国 巴里ギメー博物館蔵 埃及アンチノエ発見天馬紋(第六世紀)」

この書籍と『文様集成』を比較すると、『文様集成』の91の図版のうち79点がファルケの著作と共通することがわかる⁵²。一方、ファルケの著作に見られないのは、表3で示した1頁の「法隆寺献納御物 騎士狩猟紋」、2頁の日本と敦煌のテキスタイル、4頁の法隆寺の水瓶とササン朝様式の水差、13頁の「仏国 巴里ギメー博物館蔵 埃及アンチノエ発見天馬紋」(図7)、14頁の「独乙 アーヘンのドーム所在 絹織鵝紋」(図8)である。さらに、第56輯の図版の順番は、年代順に構成されているファルケの著作と異なっており、ファルケの著作を土台にしながら意図的に手が加えられたことを示唆している。このようなことを踏まえると、ファルケの著作にない図版の典拠として何が参照されたかを探ることにより、第56輯の図版の選定において中心的役割を担った人物を推測することができるのではないと思われる。そのためにはまず、『文様集成』第56輯の主査委員を確認しよう。表2には、主査委員として伊東、塚本、高橋、溝口の4人の名がある。とりわけ伊東は、『文様集成』出版の前から第56輯に掲載された類の文様に関心を寄せていた人物であり、この輯の編集にも特に重要な役割を担ったのではないかと考えられる。それを裏付けるのは伊東が1912年11月、1913年1月と2月に『考古学雑誌』に連載した「奈良模様の起源に就て」と題する論文である⁵³。

伊東はこの論文で、「奈良模様」を「天然の現象」、「動物」、「植物」、「幾何学的模様」、「ある事蹟を絵画的に現示したもの」(例えば狩模様)の5種に分類している。そのうえで「奈良模様」の起源は唐にあり、唐のそれはインド、ササン、東ローマに求めることができると仮定し、22の図版の分析を試みている。そして、論文の結びでは、「奈良模様」のうち狩模様とそれに関連する模様の起源はササン朝ペルシアであると結論づけている。伊東がこの論文で扱っているのは、テキスタイルに限らない。彼は、法隆寺の水瓶の模様も狩模様と同じ系統に位置付け、ペルシア様式の水差と比較し、その起源もササン朝ペルシアにあると述べている。ここで、再度ファルケの著作になかった2頁(敦煌発見のテキスタイル以外)、4頁、13頁、14頁の図版を

た、1915年5月20日の号にはその広告があり、表紙にも図版が載っている。このことからわかるように、ファルケの著作は、少なくとも『文様集成』が刊行される前年には、日本でも入手可能だったのである。



図8 『文様集成』第56輯、14頁「独乙
アーヘンのドーム所在 絹織鵝紋（ビザンツ式
第十世紀）」

俯瞰してみると、伊東の論文に掲載されているそれと符合することがわかる⁵⁴。すなわち、伊東がその起源をササン朝ペルシアに求めることができると主張したいいわゆる「奈良模様」は後に『文様集成』第56輯に採用されており、このことから第56輯のアイデア自体が伊東によって出された可能性さえ浮かび上がるのである。

ところで、ファルケの著書にもなく、伊東の論文にもない第56輯の図版の一つとして、2頁

の「支那 敦煌発見天馬紋及靈獣紋」がある。実は、1915年12月にこのテキスタイルに関する研究が美術雑誌『國華』（第307号）に発表されている。陶磁研究家である奥田誠一（1883-1955）の「東洋の古代織物に於ける波斯模様就て」と題する論文である。奥田によれば、このテキスタイルは、大谷探検隊が木頭溝（トゥルファン北東のムルトック）から将来したものであり、その形式は明らかに6-7世紀頃のペルシア芸術にあらわれたものと符合する点が多い。この論文が発表されたのは、『文様集成』第56輯が刊行される2か月前である。『文様集成』の図版が出版の2-3か月前に選定されていた流れと、『國華』の編集に当たっていた瀧精一が文様集成出版委員会のメンバーでもあることを考慮に入れると、この最新の論文が参照された可能性も十分にあり得るといえる。

さて、ここまでファルケの著作に掲載されていない図版を手がかりに、『文様集成』第56輯と伊東の論文との関係を考えてきた。伊東は自らの論文において法隆寺と東大寺のテキスタイルや法隆寺の水瓶の模様を「奈良模様」としてまとめ、その起源を探求した。『文様集成』第56輯の図版の順番も、年代順に構成されているファルケの著作とは異なり、日本から始まって西の方へと向かうような並びになっている。『文様集成』は、図版のみを掲載したもので、解説は付されていないが、前述のような事実の上に立てば、伊東の論文はそれを補完する形になり、『文様集成』の手引きとしても読めるといえるのではないだろうか。

先にも見たように、伊東が目指した研究は、日本の芸術をベースにしなが「世界的眼」をひらき、東西文明の芸術的交流を解明するというものであった。東西両方向に伝播したペルシア系文様は、このような研究を志す伊東にとって好材料であったはずである。伊

54 『文様集成』13頁のギメ美術館のテキスタイルは、三宅の論文「法隆寺蔵四天王紋錦旗と埃及の古裂紋様」、『考古界』第2篇4号（1902年9月）、187-190頁において初めて日本で紹介されている。この論文によれば、フランスのギメ美術館の「デゼイ氏」が三宅に書を寄せ、三宅が論じていた法隆寺の狩模様と似たテキスタイルの模様の写しを添付し、彼の意見を求めた。三宅は「其の意匠の同一根源より出でしことは疑ふべくもあらず」と述べ、ササン朝ペルシアから伝わったものだとしている。

55 在工科大学建築学科学生「第四回工科大学建築学科展覧会記事」、『建築雑誌』第305号(1912年5月)、215-222頁。

56 先行研究としては以下を参照。三上次男「日本のペルシア陶器」、小山富士夫・三上次男編『東洋美術 第4巻 陶磁』(朝日新聞社、1967年)、28-37頁[三上次男『イスラーム陶器史研究』(中央公論美術出版、1990年)]。榊屋友子「日本とイスラーム美術」、羽田正編『ユーラシアにおける文化の交流と転変』(東京大学東洋文化研究所、2007年)、97-104頁。四角隆二「オリентコレクションの100年 オリент美術の流入と陶芸家に関する覚書」、『東京国立近代美術館工芸館名品展 日本工芸の100年』展カタログ(岡山市立オリент美術館、島根県立美術館、2016年)、12-15頁。

東がまとめた日本の「奈良模様」は、『文様集成』第56輯の中に組み込まれることにより、世界各地に散在するペルシア系文様の系譜に連なるものとして位置付けられている。こうした意味においてペルシアは、日本の芸術を世界につなげる役割を果たしているように思われる。

6. おわりに——日本におけるペルシア美術工芸の受容

本稿では、『文様集成』を手がかりとして、1910年代の日本の建築界におけるペルシア観を考察してきた。彼らがペルシアに注目した背景にあるのは、正倉院や奈良の古美術のルーツへの関心と、日本の美術工芸の発展のために世界古美術を参考にすべきだという考えであろう。先に帝国大学工科大学建築学科で開催された東洋芸術の展覧会について述べたが、当時の建築家の間では、「東洋」はもちろん、世界各地の古美術への関心が高まっていた。とりわけ伊東、関野、塚本の海外将来品を展示した1912年の工科大学建築学科第4回展覧会では、世界各地の工芸品が陳列された⁵⁵。塚本がヨーロッパから持ち帰ったものの中には「青地に濃青の模様ある波斯瓶子」が見受けられる。こういった展覧会が物語るのは、ペルシアの美術工芸品がわずかではあれ、比較的早い時期から伊東や塚本のような建築家の手を経て、日本にもたらされ、展示されたということである。この事実は、これまでの日本におけるペルシア美術受容の研究においては、まったく指摘されてこなかった⁵⁶。

しかし、時期が下り1920年代に入ると、美術商が主に欧米経由でペルシアの美術工芸品を日本にもたらし、売立形式の展覧会で展示・販売するようになっていく。美術商の活動に関しては、稿を改めて論じる予定だが、例えばニューヨークやロンドンなどにも支店を構えていた山中商会が日本で開催した展覧会において、ペルシアの美術は「東洋」としてではなく、ギリシャやローマと並ぶ西洋美術の枠組みに入るものとして展示されている。このようなペルシア観の流動性に関しては、今後の課題として向き合いたい。

付記 本稿は、2019年度に国立民族学博物館における特別共同利用研究員制度により行った研究に基づくものである。

表 1

文様集成出版委員会委員一覧表

モハッラミプール・ザヘラ作成

氏名	生没年	略歴・職業	建築学会 役職	考古学会 会員	1911.1 総会	1911.3 趣意書	1911.7 趣意書	1911.8 趣意書
今泉雄作	1850-1931	美術史家、鑑識家 東京帝室博物館美術部長	名誉委員	●			○	○
碓井小三郎	1865-1928	郷土史家 東京府会議員	名誉委員				○	○
黒板勝美	1874-1946	歴史学者、帝国大学文科国史科卒、東京 帝国大学文科助教授、文学博士	名誉委員	●			○	○
久保田鼎	1855-1940	美術行政官、元東京美術学校長 京都奈良帝室博物館長	名誉委員				○	○
高橋健自	1871-1929	考古学者、東京高等師範学校文学科卒 東京帝室博物館歴史部次長	名誉委員	●			○	○
内藤虎次郎	1866-1934	歴史学者、東洋学者、京都帝国大学文科大学教 授、文学博士	名誉委員				○	○
中川忠順	1873-1928	東洋美術史家、東京帝国大学国史科卒 内務省古社寺保存会委員	名誉委員				○	○
新納忠之助	1869-1954	彫刻家、東京美術学校彫刻科卒、元東京美術学 校助教授、内務省古社寺保存会委員	名誉委員	●			○	○
野村重治	不詳	東京帝室博物館主事	名誉委員	●			○	○
正木直彦	1862-1940	美術行政官、教育者 東京美術学校長	名誉委員	●			○	○
松本亦太郎	1865-1943	心理学者、東京帝国大学文科大学卒 京都市立絵画専門学校長、文学博士	名誉委員				○	○
溝口禎次郎	1872-1945	東京美術学校絵画科卒 東京帝室博物館美術部次長	名誉委員	●			○	○
瀧精一	1873-1945	美術史家、東京帝国大学文科大学卒 文学士	名誉委員					○

氏名	生没年	略歴・職業	建築学会 役職	考古学会 会員	1911.1 総会	1911.3 趣意書	1911.7 趣意書	1911.8 趣意書
伊東忠太	1867-1954	建築家、建築史家、帝国大学工科大学造家学科卒、東京帝国大学工科大学教授、工学博士	委員長	●	○	○	○	○
岡田信一郎	1883-1932	建築家、東京帝国大学工科大学建築学科卒、東京美術学校講師、工学士	委員		○	○	○	○
大澤三之助	1867-1945	建築家、帝国大学工科大学造家学科卒、東京美術学校教授、工学士	委員		○	○	○	○
大江新太郎	1879-1935	建築家、東京帝国大学工科大学建築学科卒、栃木県技師、工学士	委員		○	○	○	○
龜岡末吉	1865-1922	建築家、東京美術学校絵画科卒、京都府技師	委員	●	○	○	○	○
塚本靖	1869-1937	建築家、帝国大学工科大学造家学科卒、東京帝国大学工科大学教授、工学博士	委員	●	○	○	○	○
天沼俊一	1876-1947	建築史家、東京帝国大学工科大学建築学科卒、奈良県技師、工学士	委員		○	○	○	○
古宇田実	1879-1965	建築家、東京帝国大学工科大学建築学科卒、東京美術学校教授、工学士	委員		○	○	○	○
関野貞	1868-1935	建築史家、帝国大学工科大学造家学科卒、東京帝国大学工科大学助教授、工学博士	委員	●	○	○	○	○
白石村治	1865-1929	日本聖公会伝道者、古美術研究者、東京美術学校嘱託	特別員	●		○	○	○

※各委員の職業に関しては、『建築雑誌』第296号(1911年8月)の会告にある趣意書をもとに作成した。委員の職業は、『建築雑誌』の会告に掲載された趣意書において随時更新されている。例えば、1914年2月に東京帝国大学文科大学教授に着任した瀧精一に関しては、第329号(1914年5月)以降「東京帝国大学文科大学教授」と記載されている。

※考古学会会員に関しては、『考古学雑誌』第2巻4号(1911年12月)に掲載された「考古学会会員名簿(明治44年11月末現在)」をもとにした。

表 2

『文様集成』の内容、対象地域、主査委員、出版予定であった年月

モハッラミプール・ザヘラ作成

輯	出版年月	内容	対象地域	主査委員	出版予定
第一期					
1	1911.7	平安時代後期	日本		1911.7
2	1911.8	江戸時代	日本		1911.8
3	1911.9	鳳凰	日本		1911.9
4	1911.10	飛鳥時代	日本		1911.10
5	1911.11	鎌倉時代	日本		1911.11
6	1911.12	龍	日本		1911.12
7	1912.1	桃山時代	日本		1912.1
8	1912.2	瓦 ¹	日本		なし
9	1912.3	平安時代前期	日本		1912.3
10	1912.4	獅子	日本		1912.4
11	1912.5	奈良時代	日本		1912.5
12	1912.6	室町時代	日本		1912.6
第二期					
13	1912.7	古鏡	日本		1912.7
14	1912.8	蠟股	日本		1912.8
15	1912.9	蒔絵	日本		1912.9
16	1912.10	瓦	日本		1912.10
17	1912.11	雲及水	日本		1912.11
18	1912.12	古裂	日本		1913.1
19	1913.1	建築彩色	日本		1912.12
20	1913.2	陶磁器	日本		1913.2
21	1913.3	唐草	日本		1913.3
22	1913.4	絵様	日本		1913.4
23	1913.5	建築彫刻	日本		1913.5
24	1913.6	仏像	日本		1913.6

¹ 1912 年 2 月には「古墳時代」が予定されていたが、「瓦」に変更されている。

輯	出版年月	内容	対象地域	主査委員	出版予定
第三期					
25	1913.7	龍及獅子	中国、朝鮮 ²	伊東、関野、今泉	1913.7
26	1913.8	織紋 ³	日本	確井、今泉、野村、溝口	1913.9
27	1913.9	織紋	日本	確井、今泉、野村、溝口	1913.9
28	1913.10	建築金具	日本	伊東、関野、大澤、塚本、古宇田、岡田	1913.8
29	1913.11	支那朝鮮瓦甎	中国、朝鮮	塚本、伊東、関野、大澤、古宇田、岡田	1913.10
30	1913.12	支那古銅器 ⁴	中国	内藤、塚本、正木、野村、今泉	1913.11
31	1914.1	朝鮮陶磁器	朝鮮	正木、野村、高橋	1914.1
32	1914.2	花狭間、格子欄間	日本、中国	塚本、伊東、関野、大澤、古宇田、岡田	1913.12
33	1914.3	武具	日本	正木、野村、中川	1914.2
34	1914.4	朝鮮古墳	朝鮮	関野、伊東、塚本、大澤、古宇田、岡田	1914.3
35	1914.5	建築彩色	日本、中国、朝鮮	塚本、伊東、関野、大澤、古宇田、岡田	1914.4
36	1914.6	仏像仏画	日本	中川、黒板、関野、新納	1915.5
第四期					
37	1914.7	碑文様	中国	伊東、塚本、関野	1914.8
38	1914.8	蒔絵	日本	今泉、中川、野村、正木	1914.7
39	1914.9	印度サラセン建築文様	インド	伊東、大澤、塚本	1914.9
40	1914.10	天井	中国、朝鮮	大江、岡田、亀岡、古宇田	1914.12
41	1914.11	古瓦	日本	高橋、天沼、関野	1914.10
42	1914.12	朝鮮古墳	朝鮮	岡田、関野	1914.11
43	1915.1	陶磁器	中国、安南、シャム、ペルシア、アラビア、エジプト、トルコ	今泉、塚本、正木	1915.1
44	1915.2	上古文様	日本	高橋	1915.2
45	1915.3	上古文様 ⁵	日本	高橋	1915.2

² 日本も含まれる予定であった。

³ 「織紋」は1913年9月に予定されていたが、実際には8月、9月と続けて出版されている。その代わり、第三期では1914年6月に予定されていた「絵巻中の文様」（高橋、溝口、今泉が主査）が出版されていない。

⁴ 予定では「銅器（支那、朝鮮）」となっている。

⁵ 「上代文様」は、1915年2月に予定されていたが、実際には2月、3月と続けて出版されている。第四期では、1915年5月に予定されていた「更紗」（今泉、野村、正木が主査）および、1915

輯	出版年月	内容	対象地域	主査委員	出版予定
46	1915.4	文字文様	日本、中国、トルコ、インド	中川、黑板、正木、溝口	1915.3
47	1915.5	霊獣霊鳥	中国、朝鮮、インド、ペルシア 西トルキスタン、カンボジア、 ジャワ、ビザンティン	塚本、古宇田、関野	1915.4
48	1915.6	支那六朝時代 文様 ⁶	中国	野村、今泉、溝口、塚本、 関野	1916.3
第五期					
49	1915.7	蒔絵	日本		なし
50	1915.8	更紗	日本	野村、今泉、溝口、岡田	1915.7
51	1915.9	印籠	日本	正木、野村、溝口	1915.9
52	1915.10	古代印度唐草	インド、セイロン	伊東、塚本、野村、大澤	1915.10
53	1915.11	堆朱堆黒	中国	今泉、溝口、高橋	1915.12
54	1915.12	屋根飾	フランス領インドシナ、 中国	関野、塚本、古宇田、天 沼、大江	1916.1
55	1916.1	鐘文様	日本	高橋、野村、亀岡、天沼、 伊東	1915.11
56	1916.2	波斯系文様 ⁷	日本、中国、ペルシア、 エジプト、シリア、ビザ ンティン、イタリア、ス ペイン等	伊東、塚本、高橋、溝口	1916.4
57	1916.3	窓及扉	トルコ、インド、フランス領 インドシナ、エジプト、 中国、朝鮮	塚本、伊東、高橋、古宇 田	1916.5
58	1916.4	式紙及唐の紙	日本	溝口、正木、今泉	1916.6
59	1916.5	露盤水煙類	日本、朝鮮、中国、ビル マ、インド、セイロン、 トルコ、エジプト	塚本、野村、大江、古宇 田、天沼	1915.8
60	1916.6	絵巻物文様	日本	正木、黑板、今泉、溝口、 高橋	1916.2

※各輯の内容に関しては、予定目次と実際に出版されたものに若干の相違が見られる場合もあるが、注での言及は相違が著しいものととどめた。

年6月に予定されていた「絵巻中ノ文様」(今泉、高橋、瀧、溝口が主査)は出版されなかった。

⁶ もともと第5期に予定されていたが、予定より早く出版された。

⁷ 予定では「薩珊系文様」となっている

表3 『文様集成』第56輯の図版のうちファルケの『絹織物の美術史』にないもの

モハッラミプール・ザヘラ作成

頁	図版	伊東論文図版番号
1	法隆寺献納御物 騎士狩獵紋（奈良時代）	なし
2	〔右上〕 支那 敦煌発見 天馬紋及靈獸紋（唐時代）	なし
	〔右下〕 奈良 東大寺蔵古裂（奈良時代）	3
	〔中上〕 奈良 東大寺蔵古裂（奈良時代）	5
	〔中央〕 同上	6
	〔中下〕 同上	7
	〔左〕 大和 法隆寺献納御物錦裂（奈良時代）	4
4	〔右〕 法隆寺献納御物水瓶（奈良時代）	18
	〔中央〕 露国 ペトログラード・ボプリンスコイ伯菟集品（薩珊時代銅壺 第六ー第七世紀）	20
	〔左〕 露国 ペトログラード・ボロフツォフ菟集品（薩珊時代銅壺 第六ー第七世紀）	19
13	仏国 巴里ギメー博物館蔵 埃及 アンチノエ発見 天馬紋（第六世紀）	14
14	独乙 アーヘンのドーム所在 絹織鵝紋（ビザンツ式 第十世紀）	17